

連載：原点

「想いを胸に」

湖北高等学校 左口孝史

－はじめに－

私は他県で3年間、中学校教師をしていました。授業や部活動、小中学生を対象とした実態調査のための問題作成委員会など数学の研究活動に多く参加していました。そんな中、少し考えるところがあり、一度教師を辞めた上で改めて千葉県の採用試験を受け直し、4月から湖北高等学校に勤務しています。

－想い－

学校の先生という仕事には、小さい頃から憧れを抱いていました。ただ、その頃の憧れは漠然としたものでしかありませんでした。教師への想いが強くなったのは高校生のとき、クラスメイトに数学を教えるようになったことがきっかけでした。教えている中で、モノを教えることの楽しさとともに数学の面白さを感じ始め、改めて教師という職業に就きたいと強く思うようになりました。教師というものは、「教えることが好き」「数学が好き」そして何よりも「子どもが好き」である私には最適な職業であると思っています。そして、今、1人でも多くの子どもたちに数学の楽しさ・面白さ・美しさを味わわせてあげたいという想いで教師をしています。

－現実と課題－

現在勤めている学校には数学どころか算数の内容も十分に理解できていない生徒も多くいます。九九が満足にできない生徒もいます。授業では「できないからやりたく

ない」という声が多く聞こえてきます。「できない」と思ってしまった子どもたちにとって「数学」という響きは嫌悪感しか与えていないように見受けられます。そういった子どもたちを相手に授業をすると、どうしても「こなす授業」になりがちで、本来の目的である「楽しい・面白い・美しい数学」を伝えることはできません。どのようにして数学に嫌悪感すら抱いてしまっている子どもたちに数学の魅力を伝えていけるか。それは、これからの教師生活で常に課題となることの1つであると思います。

－コミュニケーション－

その課題を克服していくには、授業を作成・展開する力が必要であることは明らかです。そして、それは経験と研究を重ねるごとに身に付けていけるものだと考えています。しかし、1番の課題克服のポイントとなるのは子どもたちとの関わりであると思います。普段の何気ない会話、休み時間や部活動等で築き上げられた人間関係は授業に大きく影響してきます。時代の移り変わりにより子どもたちも変わってきています。子どもたちとの関わりを多くもつことは、その変化にいち早く気づき、「そのとき」「その子どもたち」に合った授業作りの手助けをしてくれます。教師生活としては4年目となりますが、子どもたちと数学への想いを忘れず、日々の関わりと学習を積み重ねていきたいと思っています。